



北海道の道、にしひがし

エッセイスト

川口 祐二



大崎手前の道

日 本中の漁村を巡り、そこで生きてきた人たちの話を聞いて記録する仕事を始めて、早くも15年になる。私は自動車の運転免許を持たない。だから、ひたすら鉄道を使い、バスや徒歩で海辺の道に行く旅である。これからもそうだろう。漁村への道は、山坂を越える道であったり、崖の上の岨道だったりすることが多い。

しかし、北海道の漁村巡りは、鉄道の便が少ないから、駅を出てしばらく歩いてというわけにはいかない。幸い、札幌におすまいの若い友人である石崎淳一さんが、自動車を走らせてくれるので助かる。道内の人でも、そう何度も行かないような所まで訪ねることができる。

北海道開発局など、幾つかの機関が共同で実施する北海道の道にまつわるエッセイコンテストという催しが、四年前から続けられていて、私はその審査員の一人として参加している。友人はその仕事を引き受けている人である。「道」との縁といえようか。

いつか案内していただいて、一日走りまわった宗谷からサロマ湖畔三里浜までの道は、今も忘れがたい。あのときが初めての道東の旅であったから、うろ覚えでしかないのだが、稚内空港から東へのゆるい坂の道、そして宗谷岬から南下して、知来別^{ちらいべつ}や浜鬼志別^{はまおにしべつ}への道の、ひろびろとした景観は、北海道の特色を余すところなく発揮していた。

それらは、見渡す限りの果てしない道という感じであった。これがまた、本州はもとより、四国、九州の海辺では見られない雄大さなのである。単調と片づけてしまえばそれまでなのだが、初めての旅の者の眼には新鮮であった。移り変わる広漠とした山野と、鉛色のオホーツク海の波との対照が楽しいものであった。

猿払の道の駅が忘れられない。私はここで、オホーツクの海で働いてきた地元のお母さんたちから、思い出話を聞いた。ホタテガイが息づく猿払の豊かな海を育てた人びとの苦労話であった。集った女性たちは、思い思いに5年に余る血を吐くような辛かった浜の暮らしを語ってくれた。話してくれる話の内容のみじめさが、立派な道の駅の建物とはいかにも不釣合に感じられた。あの声が今も耳にある。

猿払から紋別までの道も、広くゆったりと一直線を描くといってよい。快適そのものであった。一時間走る間に、何人の人に会っただろうか。夏祭の準備をしていると思われる人15・6人が、神社に集まっているのを見ただけであった。砂防用に植えられた樹々は、あれからどれだけ伸びただろうか。

根室へは列車で何度か訪ねたことがある。小市の墓を参りたいと、市内で土産物を商う人をお願いしたことがあった。伊勢若松から江戸へ荷を運ぶ途中、駿河沖で遭難し、7か月余の漂流ののち、千島のアムチトカ島にたどり着き、その後、ロシア各地をさまよった大黒屋光太夫たち乗組員一行の苦難の話はよく知られる。その仲間の一人が小市。幸い厳寒のロシアでは生きのびて、光太夫と、同じ仲間の磯吉と3人で根室に帰り着くことができた。だが、不幸にも小市は、故郷伊勢の海を見ることなく根室で没する。立派な墓が根室の人たちによ



ハマナスの花が咲く根室市街の道

ってできていた。ごようまい
沙布岬のすぐ手前の瑠瑠環へ行くのに、市内の坂のある道を通った。道路の中央分離帯にハマナスが植えられていた。足を止めてよく見たら、花は八重咲きで美しかった。

積丹半島を走るとき豊浜トンネルをくぐったときも感動した。事故のあと、昼夜をわかたぬ工事が続いたという。見違えるほどのトンネルと道路、奇岩が続く岸边と、背後の屹立する崖。これらは、猿払から南へ走る道とは、まるで正反対の特徴を持っていた。

このときも札幌の友人の案内であった。神恵内
村までの走行を無心したのである。古平から峠を越え、日本海へ出る。手にしている二万五千分の一地図には、道路が書き込まれていない。道がないようですよ、と運転する友人に訊

「小市がなくなって野辺の送りをするときですね、根室の人たちは、道に行く樞に向かって、真っすぐに行かっしゃい、と言ったそうですよ。迷わずに極楽へ行きなさい、という祈りをこめた気持ちからでしょう」

案内人のこの話に、北辺の人びとのやさしさを思い、私は感激した。

根室は丘が続く街である。そのとき、納



神恵内に続く道



神恵内村の丘に建つ松浦武四郎の歌碑

ければ、いい道ができているから大丈夫です、と答える。その日の目的は、北海道という名をつけた、いわばその名づけ親である幕末の探検家松浦武四郎が、かつて歩いた道を、この足でと思ったからだ。武四郎も三重県の人。坂道を登った村を見降ろす丘に、歌碑が建つ。「婦るふの海」と詠まれた武四郎の歌一首が、大きな石に彫られていた。



友人石崎さんとの最初の出会いは、オロロンラインを北上して苫前町でバスを捨てたときであった。ここで漁村の女性たちの集いがあり、その席へ招かれて行ったことである。

講演を終えた翌日、苫前の海で働く女性に会うため、町内をバスで走ったとき、車窓から、「長島」というバス停を見た。このことを、町の役場の課長さんに話したら、あそこは、三重県桑名の近くの長島町からやってきた人たちの集落である、と言われる。古老の何人かは、今でも、「そいでな」という、伊勢的な言葉を遣うことがある、と聞いた。私の北海道の道への思いは、なぜか三重県ゆかりのところばかりである。身びいきということだろう。

北海道の道は、あまねくゆったりとしている。このことは、誰でもが認める評価だ。私はそれとともに、道を含めた、両側の風景がいいと思う。まわりの風景と道とがうまくとけあって均衡がとれている。そこに絶妙な味がある。

だが、何といてもいちばん好きなのは、札幌のど真ん中、時計台の見える街角、あの雑踏である。ここには数知れない歴史の蓄積があり、また、北の大地を拓いていった人たちの情熱とセンスが満ちあふれているのだ。

ある作家が、本当に古いものは、いつも新しい何かを与えてくれる、と言ったが、この言葉通りの街角である。道は文化の尺度であるともいわれる。それを実証する四つ角でもある。

北海道にしかないこの往還の雰囲気、何度来ても私は息を呑む。そして口ずさむ歌、それが、「時計台の鐘」のひとふしだ。

時計台の鐘が鳴る
 大空遠くほのぼのと
 静かに夜は明けて来た
 ポプラの梢に日は照り出して
あした
 きれいな朝になりました
 時計台の鐘が鳴る



こここそ、北の交差点の代表である、といえるだろう。



平成14年夏、熊本県天草での環境会議の帰途に天草空港で

Profile プロフィール
 エッセイスト 川口 祐二

かやくち ゆうじ 1932年三重県生まれ。70年代初頭より農村から合成洗剤を無くす実践運動を展開。88年、岩波新書の「私の昭和史」に採られた「渚の五十五年」が反響を呼び、日本の漁村を歩き、海辺の環境や暮らしの変遷を書き続けている。01年、環境保全活動に対して田尻賞受賞。現在、NHK農林水産通信員、環境省委嘱自然公園指導員、海の博物館(鳥羽市)評議員。著書に「遠く遠く人-佐多種子さんとのかみ」(ドメス出版)「苦あり楽あり海辺の暮らし」(北斗出版)など多数。

